

新型コロナウイルスワクチン2回接種後の副反応の程度とIgG抗体価との関連

◎堀 憲治¹⁾、広瀬 佳子¹⁾、宮原 祥子¹⁾、征矢 佳輔¹⁾、鈴木 貴典¹⁾、北原 早紀¹⁾、吉澤 聡美²⁾、竹内 信道³⁾
伊那中央病院 臨床検査科¹⁾、同 薬剤部²⁾、同 認定感染制御医³⁾

【はじめに】

新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の全世界的な拡大により、日本におけるワクチン2回接種率は75%を超えているが、接種後の発熱、頭痛、倦怠感などの副反応は大きな不安要素の1つである。今回、mRNAワクチン2回目接種後の副反応の程度と、接種後一定期間後の同ウイルスに対するIgG抗体価との関連を年齢、性別などの因子を考慮し検討した。

【対象と方法】

当院においてワクチン2回目接種を終了した20～50代の職員のうち、本研究参加に同意を得た者を対象とし、2回目接種5ヶ月後(+7日以内)に採血および問診を実施した。測定はアボット社製「アーキテクト i1000SR」ならびにSARS-CoV-2 IgG測定試薬「ARCHITECT SARS CoV-2 IgG II Quant」を用いた。本キットの検出抗体はスパイクタンパク質S1サブユニット受容体結合ドメイン(RBD:receptor binding domain)に対するIgG型抗体である(以下:S-IgG抗体)。副反応調査は当院薬剤部によってオンライン収集さ

れた結果を用いた。

【結果】

対象者269名(男性39.8%,女性60.2%)、S-IgG抗体価の中央値1299.5AU/mL、四分位範囲800.2～1947.3AU/mL、最小値128.5AU/mL、最大値8557.3AU/mLであり、ばらつきが大きかったが陰性化した者はいなかった。副反応の定義として37.5℃以上の発熱に加え、何らかの全身症状を中等度以上認めた者とした場合、男女ともに副反応あり群の方が有意にS-IgG抗体価が高かった($p<0.05$)

【結語】

ワクチン2回目接種後の副反応の強さの程度はS-IgG抗体価の長期的な持続に関連し、副反応が強い方がより高い中和活性を長期的に保持している可能性が高い事が示唆された。

連絡先：0265-72-3121